

英語科編 1-1

第1-1号

平成21年11月20日

18 英語教師六十年

青木 常雄 茨城県出身 東高師43卒
在職43〜45 東京教育大教授

明治43年の附属中学の教官から始まり、昭和45年、東洋女子短期大学教授を定年退職するまで、英語教育一筋に携わってきたのは青木常雄です。彼の英語教師としての六十年は、自伝の『教壇生活の思い出』や、弟子らによる『青木先生を偲ぶ』により知ることができます。

青木の教師生活は、前述したように、明治43年に、附属中学の教官に内定したときから始まりました。彼の「東京高師附属中学校時代の思い出」によれば、中学校に内定したときに、嘉納校長に自宅に呼ばれ、次のように言われたようです。

「高師の卒業生で附属の教師になるのは名誉なことだ。しかしそれだけに責任も重い。他の学校へ行く同級生よりも勉強しなくてはいけない。君には君なりの目標もあろうが、わしの考えも述べるから、考えてみるがよい。第一は、君が10年も20年も附属に居る場合だが、自分も勉強し、同僚にも勉強させて、附属の英語科のスタッフのレベルをうんと上げ、君たちが講師となる講習会を開いても、他の中学の教師が四百や五百は聴講できるようにして貰いたい。勉強はもうごん自分ですべきだが、時々は外人の指導を受けるのも悪くない。学校のDirector Woodは相当の学者と聞いているから、君が附属側の幹事となり、塾(嘉納塾)の世話をしている外語出の吉米地(後に衆議院議員になる)が外語側の幹事となって、週一回指導を受けるがよい。月謝は1人5円(これは当時の中学教師の月給の1割にあたる)とする。5人出席するとすれば合計25円となるが、これでは少ないから、わしが25円足して上げるから50円として月謝とするところ。」

このように言われた青木は、嘉納が毎月出金してくれたことに感謝しつつ、吉米地や附属の教官5人のほかに、石川林四郎や渡辺半次郎らとともに勉強会を行ない、英語の力を磨いていきました。

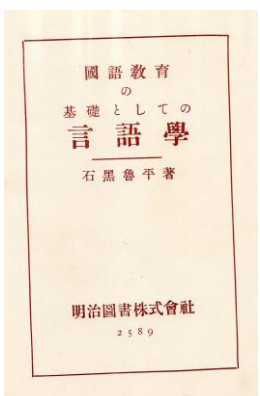
そのような青木が在職した当時の(明治末)附属中学の英語の学習の様子も、青木は上記著書の中で記しています。それによれば、

「附属中学校では、1年から5年まで、指導に熱心な英国紳士Sweet氏から、毎週一回会話を習っていた。日本人教師も、oral drillを多分に加味した授業をした。大正10年代から昭和年代にかけて影響を与えたPalmerのOral Methodや昭和30年代に入つて新たに人気を得たFriesのOral Approachの所説をかなり取り入れたような教授法でやっていたのである。」そして、青木は、「附中のhearing & speaking & readingを相当重視する教授法を活用するためには、ぜひともこの方面の修行を怠ってはならない。」と思ひ、都内の中学校や外人教師の授業を数多く参観するだけでなく、附属中の教官を辞め、やがて新しくできた東高師の英語の専攻科に入りました。

ところで、青木は英語以外にも柔道が強かつたようです。それは、「初めて附属で授業をした日のこと。リーダーを手にして教場に行くとすると、同僚の1人から「先生は英語も教えるのですか」と聞かれた。私を柔道の教師と思つたらしい。昼休みに廊下を歩いてみると、上級生の一人から「先生は英語も教えるのだぞうですね」と言われた。これも私のことを柔道の教師と思つたのである。自分でも柔道が続けようと思ひ、加納先生からも、柔道は続けるがよい、と言われていたのですが、「今まで余りに柔道に熱中しすぎたことを反省して、ぶつりやめることとした。」そして、英語教育にますます専念しました。

このような青木は、その後、高等師範の教員を兼任しながら、旧制の成蹊中学校で教え、吉祥寺の成蹊高校から英語科主任として高給で迎える話などがありました。それらはいずれも断り、東京教育大学・東京女子大・東洋女子短大などで教鞭をとり、昭和53年、91歳で亡くなりました。その間には、たくさん英語教師を育てていきました。

青木常雄著『教壇生活の思い出』修文館45
刊行会編『青木常雄先生を偲ぶ』刊行会昭62



19 「標準語」をめぐる

石黒 魯平 愛知県出身 東高師44卒
在職44〜47 駒沢大教授

石黒魯平は、その後年の活躍からすれば、英語よりも国語の研究者としてあげたほうが良いと思われる教官です。それは、彼の名声や研究者としての著書などが、日本語に関するものが多い、中でも「標準語」にかかわるものが多いからです。

明治政府は、当然ながら中央集権化を進めますが、国内での情報が迅速になり、また、人々の行き来が激しくなるに従い、各地の方言は問題となり、共通語が考えられてくるのは当然のことと思います。それについては、明治政府が、明治35年、国語調査委員会を設置し、その中で、「方言ヲ調査シテ標準語ヲ選定スルコト」などのことを決めていきます。

これに関して、石黒は、附属中の教官を勤めながら、あるいは大学教授を勤めながら、『標準語』他、多数の著書を著していきました。

ただ、彼はその出身が英語科であり、附属中では英語教官として生徒に英語を教えるだけでなく、高等師範在学中には、英語方面にも進もうとしていたようです。それは、師範在学中同級20人でWebster講をつくつて、高額の辞書を購入していることからわかります。その講とは、各自が毎月1円ずつ出して2ケ年の後、皆が1冊ずつWebsterの新版大辞書を持つというものです。彼は、その講のおかげで、28円(当時の教官の給与は50円くらい)山口でその辞書を購入し、英語を一生懸命勉強しているからです。ただ、日露戦争後の当時の日本では、少し、英語よりも国語重視の風潮があり、そのこともあって、石黒は「言語学」中でも標準語問題にかかわっていったのかも知れません。

石黒魯平著『標準語』明治図書 昭和25